

- S1M ワークショップ 開催レポート
- 不正論文の洗い出しに威力を発揮する「CrossCheck」
- 大学医学会情報交換会 開催レポート

S1Mワークショップ  
開催レポート



## 「もっと知りたい！」 という声に応じて 少人数のワークショップ始めました

皆様実際にやっていただきました。また、論文画面を構成する三つの画面である「論文情報 (Manuscript Information)」、「履歴 (Audit Trail)」、「ファイル管理 (Manuscript Files)」について機能や操作方法についてご紹介しました。implサイトの存在やシステム外でやりとりしたメールを「履歴 (Audit Trail)」へ記録する方法などが話題に挙がる一方、設問やレイアウトにユーザーごとの仕様が顕著に現れる「著者への設問」など、各ユーザーのサイト間の設定の違いについても話題となりました。

ワークショップを通じて各ユーザーのサイトの工夫や運用上のポイントを取り入れ、作業効率のアップやサイトの見直しにも役立てていただけたかと思えます。

■ セッション2 ■  
「通常の審査フローの復習」、「こんな時はどうする？」について

論文の差し戻し、再提出、投稿受付、査読者の選出、査読提出、編集委員の判定、採否決定と多岐に渡るタスクの中で、普段操作をしている審査フローの復習のほか、豆知識やトラブルシューティングとして、査読結果提出の代理操作 (proxy) や、操作を誤った場合の対処などを体験いただきました。利用歴にかかわらずユーザーの皆様が操作体験をスムーズに進行され、あるユーザーからは「査読期限の延長をもっとインターフェイスに近い場所で作出来ないか？」とご質問をいただきました。S1Mをよくご理解いただいていることに感銘を受けました。

■ セッション3 ■  
「依頼論文」、「採択後の処理」について

「依頼論文」では論文の執筆を依頼するフローのご紹介をし、概要と操作方法についての理解を深めていただきました。

まだ運用開始前のユーザーからも「機会があったら使ってみよう」といった声がかれました。

「採択後の処理」については、たびたび「採択後の論文がダッシュボードに残っているが、どうして良いかわからない」というご質問をいただいたので、処理するための一連の操作方法をご紹介しました。また、サイト内に蓄積された原稿ファイルの総容量が1GBを超過すると、課金対象となるため、その処理の必要性についてもご説明しました。後日、未処理となつていくユーザーへ個別にて再度処理方法についてご案内し、ご対応いただいております。

### 嬉しいお言葉 そしてありがたいご指摘も

ご参加頂いたユーザーより、「明日からの業務に活かせるポイントがたくさんありました」「目の前で教えてもらったので、分からないことがあったときにすぐに聞けて助かりました」など、さまざまな嬉しいお声をいただきました。その反面、利用歴の長いユーザー

- 【参加ユーザー】  
日本ロボット学会、日本公衆衛生学会、日本大学医学会、日本皮膚科学会、日本看護研究学会、日本消化器内視鏡学会・関東支部、日本消化器がん検診学会、映像情報メディア学会、日本呼吸器内視鏡学会、日本地学協会、日本栄養・食糧学会、日本表面科学会、日本肺癌学会、日本東洋医学会、日本バーチャルリアリティ学会、日本コンピュータ化学会、国立感染症研究所、日本肝臓学会、日本神経学会、応用微生物学研究奨励会、日本油化学会、資源・素材学会、日本鉄鋼協会 (敬称略、順不同)

ザーからは「現時点では初歩的過ぎて物足りなかった。導入時にこのような場があればよかった」などのご指摘もいただきました。今後もユーザーの皆様からいただいたご意見をもとに随時改善しながら、より良いワークショップとなるよう努めてまいります。

また、ワークショップ終了後にご記入いただいたアンケートでは、「委員会資料作成のためのレポート機能」や「事務局ダッシュボード上にある各種ツール」について、もう少し詳しく知りたいとのご要望が多数ありました。ワークショップは今後も2ヶ月に1度のペースで開催し、ご要望のテーマは随時取り上げていく予定です。

ScholarOne Manuscripts<sup>TM</sup> (以下S1M) をもっと便利に、もっと簡単に使っていただけるよう、少人数制ワークショップの第1回を1月28・29・30日に開催しました。

画面を見ながらの説明だけでなく、ユーザーが実際に操作する体験を交えたもので、少人数ならではの意見交換や親睦を深める場となりました。

S1Mを介して、  
ユーザーとユーザーが繋がる

記念すべき第1回のテーマは「論文の投稿から判定までの一連の流れを共有し、基本的な処理や便利機能を実際に体験してみましょう！」でした。

企画段階では利用歴1年前後のビギナーユーザーを対象として1日のみの開催を予定していましたが、利用歴を問わず多くの応募をいただいたため、急遽3日間の開催となりました。

本ワークショップは、昨年行われた大規模なユーザーカンファレンスと同様にS1Mをより深くご理解頂くため、きめ細やかにサポートすることだけではなく、「ユーザー間で情報を共有し、横の繋がりを作る機会を提供すること」も目的としています。さまざまな情報をユーザー間で共有することにより、日常業務の課題を解決するヒントを見つけていただければと考えています。

少人数制のワークショップ  
だからこそできることを

■ セッション1 ■  
「Implementation site」、「代理投稿」、「論文画面」について

開発元のテスト用サイトである「Implementation site (impl.サイト)」と「Proxy (代理操作)」という機能を使って論文投稿の操作をユーザーの

S1M開発元の Thomson Reutersが毎年開催している「ScholarOne Manuscripts User Conference」が今年4月10・11日にフロリダで開催されます。User Conferenceでは運用事例、新機能、ロードマップなどを含めた様々なプログラムが予定されていますが、今回は、併せて催される「Configuration Training」にも招待され、杏林舎から真鍋と山田が参加して参ります。今回、初の開催となるConfiguration Trainingはサイトの基幹部分の構築/設定に関する講習で、招待されるのは、エージェントの中でもサイトの細部を理解している限られた人達のみです。この機会に一層の知識と技能を習得し、今後も皆様により快適なS1Mのご利用環境を提供できればと考えています。

ユーザーのみならず日頃の忙しい業務に追われる中、貴重な時間を割いてワークショップにご参加いただいておりますように、我々も今回のTrainingに関わらず、技術および知識の向上には努力を惜しまない所存です。参加レポートは6月に発行予定のS1M NEWSに掲載いたしますので、楽しみにお待ちください！

## 「ScholarOne Manuscripts User Conference」と 「Configuration Training」

に参加します！ 本家ユーザーカンファレンス

最近、学術論文のコピペ等による不正が社会問題になっています。学術研究は過去の膨大な研究成果の積み重ねによって発展してきたものであり、論文間の引用・被引用関係は研究の正当性や信頼性を判断するうえで極めて重要です。研究者倫理に基づく正当な引用であれば、仮に引用部分が多くてもオリジナリティがあると認められる場合がありますし、引用部分が少なくてもコピペを思わせる部分があると不正論文の疑いを招きます。この不正論文の検知に効果を上げているCrossCheckというツールがあります。CrossCheckは、iParadigms社のiThenticateソフトをベースにCrossRefが提供している剽窃検知ツールです。

# 不正論文の洗い出しに威力を発揮する CrossCheck

昨年のS1Mユーザーカンファレンスでご発表頂きましたが、公益社団法人化学工学会では、ScholarOne Manuscripts™にCrossCheckを組み込んで、不正論文の洗い出しに成果を上げています。2013年1月以降、全投稿論文を対象に、各審査段階（初回投稿受付時、審査時、採択後）においてCrossCheckを使用して既発表論文との一致部分を抽出し、その結果を編集委員が判断しています。剽窃チェックの精度が高く、論文ファイルをアップロードするだけで短時間に自動的に一致部分の抽出が行なえるなど、CrossCheckはさまざまなメリットをもたらしています。

## トムソン・ロイターからのお知らせ

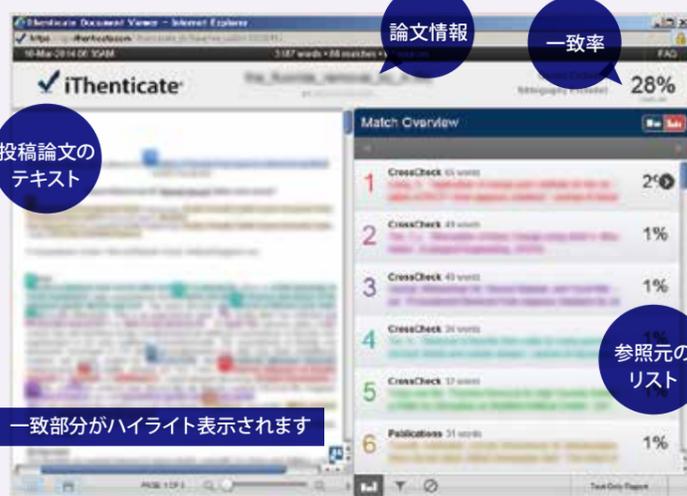
トムソン・ロイターは2014年、新たな布陣で活動を開始しました。ScholarOne Manuscripts™やWeb of Scienceを展開するIP & Science部門のグローバル責任者がBasil Moftahへバトンタッチしました。さらに日本法人では学術情報ソリューション営業部シニア・ディレクターを務めていた棚橋佳子が、今後は取締役日本営業統括部長として活動します。トムソン・ロイター日本法人として初の女性の役員となります。今まで以上にスピード感を持ちながら、S1Mユーザーのみならずのお役に立てるよう取り組んで参りたいと存じます。来る4月10日～11日には、米国フロリダにて「2014 ScholarOne Manuscripts User Conference」を開催します。出版社をはじめS1Mユーザーの皆様にご参加いただき、最新情報の収集やネットワーキングの機会を提供いたします。S1Mは2014年も新機能の公開などが目白押しです。今後明らかになってくる最新情報にも、ぜひご注目ください。

## 化学工学会での運用事例

### 【チェックのタイミング】



### 【レポート画面】



### 【レポートをどう読むか】

- 一致率 (Similarity Index Percentage)**
- %はOKで××%はダメ、と単純に線引きはできない。
  - 一致率が高い論文 (参照元の論文)**
    - 論文全体の一致率は高くないが、参照元論文の中に、特定の文献の一致率が高い場合がある。
    - 比較的一致率の高い論文は引用されているか。
  - 投稿論文のどの箇所が高くなっているのか**
    - IntroductionやExperimentalか、ResultsやConclusionか。

### 利用のメリット

- チェックの精度が高い
- チェックに時間がかからない
- ファイルをアップロードするのみ
- データベースの検索は不要

### 有効利用のヒント

- 該当論文にはフラグとメモを残す
- どの論文との一致率が高いか
- どの箇所の一致率が高いか
- 引用されているか
- 採用後も再度チェック

### 利用時の注意点

- データの改ざん、図の修正などは検知されない
- 多重投稿中の論文はチェックされない
- 一致率が比較的高くなくても、剽窃されているケースがある
- 最終的には編集委員が判断する

CrossCheckの利用をご希望の場合は、J-STAGE掲載誌であればJST (科学技術振興機構) へ申し込むことができます

大学医学会のジャーナル制作に関わるご担当者様にお集まりいただき、4月24日に『大学医学会情報交換会』を開催いたしました。

**大学医学会における学術ジャーナルの在り方を考えよう**

いち早くオンラインジャーナルによる論文の公開を始め、オンライン投稿・査読システムの導入及びインパクトファクターの取得に積極的に取り組んでいるなど、大学医学会としては、その活動が傑出している日本医科大学医学部を参考にし、大学医学会における学術ジャーナルの在り方を考えようというのが主な目的です。

まず『日本医科大学医学雑誌』がMEDLINEに収録されている雑誌であり、PubMedにも収録されていること、論文を幅広く公開する重要性を感じ、1999年にプロジェクトを立ち上げ、オンライン化と欧文誌化がなされたこと、さらに2011年にはWeb of Scienceに収録され、インパクトファクター算出対象の雑誌となったことなど、これまでの歴史や取組みの詳細、そして、そこに貫かれる理念などの説明が行われました。それを受けて、それぞれの大学医学会における現状などについて、意見の交換がなされました。

## 編集後記

寒さも和らぎ、過ごしやすい時期となりましたが、多くの学協会様では年度の変わり目でお忙しい毎日をお送りのことと存じます。予定より少々遅れましたが、S1M News第2号を無事発刊いたしました。S1Mワークショップは、今年から始めた新たな企画で、各回、目的や機能などテーマを絞って隔月で開催していく予定です。皆様にとって有意義なワークショップとなるよう努めてまいりますので、今後の奮ってのご参加をお待ちしております。また、CrossCheckの運用事例は、昨年のS1Mユーザーカンファレンスでご発表いただきましたが、とても旬な話題でもあり、ご参加いただけなかった学協会様へも導入ご検討のきっかけとしていただきたく、あらためて掲載いたしました。山下様にはご協力感謝申し上げます。次号は、アメリカで開催される本家S1M User ConferenceとConfiguration Trainingで学んだ内容をレポートしますのでお楽しみに。

## S1M NEWS

2014年3月28日発行 第2号

発行 株式会社 杏林舎  
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10  
TEL.03-3910-4311  
FAX.03-3949-0230  
URL http://www.kyorin.co.jp

編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎  
E-mail s1mnl@kyorin.co.jp

©株式会社 杏林舎 本誌掲載の記事・写真・イラストレーション等の無断転載を禁じます。

## 開催レポート

# 大学医学会情報交換会

第1回 大学医学会における学術ジャーナルの在り方を考えよう

優秀な論文をいち早く公開していくことが最重要

その中で印象深かったのは『日本医科大学医学雑誌』の編集担当教授のお言葉です。大学医学会では珍しく、オンライン化やオンライン投稿・査読システムを導入した理由を問われると、間髪を入れずにこうお答えになりました。「世の中の流れがそうだから。特別なことではありません」

優秀な論文をいち早く公開していくことが最重要であり、それを促進するシステム導入に躊躇はいらぬということです。

弊社がオンライン投稿・査読システムの導入をご提案する際には、とかく



利便性ばかりを強調しがちですが、「優秀な論文をいち早く公開していくことが最重要」という点は、ジャーナル制作に携わる者にとって、まさに原点と言え、弊社にとっても襟を正す機会となりました。

今後、こうした大学医学会における情報交換会は継続的に開催していく予定です。興味を持たれましたらinfo@kyorin.co.jpまでお気軽にお問い合わせください。